

2020年4月5日 説教「お赦してください」

ルカの福音書 23章 32~43節

ゴルゴダの丘にまでは十字架を担いで進まれた主。いよいよその時です。

1. 三本の十字架 (32~34節)

①引かれていき (32)「**ほかにもふたりの犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために、引かれて行った。**」ローマ帝国の極刑は十字架刑でした。いわゆる大罪人がこの刑を受けるのです。今ゴルゴダの丘にイエスが、クレネ人シモンの助けも借りて、ようやく辿りつきました。他にいっしょに十字架につけられるのは、二人の犯罪人でした。彼らの背景はわかりませんが、確かに極刑を受けるような罪を犯してきたようであります。

②十字架 (33)「『**どくろ**』と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、**イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとりには右に、ひとりには左に**」どくろというのは、頭蓋骨のことです。ゴルゴダの丘がそのような形をしていたとも言われます。あるいは、十字架に着けられた者たちのどくろが、この丘に埋められていたからという説もあります。ここに、イエス・キリストが十字架につけられた記事がありますが、客観的な記し方です。十字架の刑は、両手と足に釘を打ち付けるのですから、痛みは相当です。キリストはそれを受けてくださったのです。同じ時に、二人の犯罪人たちが一緒に十字架につけられました。一人は右に、一人は左にとありますが、イエスの十字架は真ん中であつたということがわかります。

③お赦してください (34)「**そのとき、イエスはこう言われた。『父よ。彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか自分でわからないのです。』**彼らは、くじを引いて、**イエスの着物を分けた。**」その時のお言葉こそ愛です。ご自身を十字架につけた者たちやその周辺の者たちに、もしかすると弟子たちをも含めた者たちに、主は言われたのです。「父よ、彼らをお赦し下さい」と。彼らは自分のしていることがわからないのです、という人間理解が示されます。その後、兵士たちは、あの紫の衣に続いて、イエスの着物まで、くじを引いて分けたというのですから、なんともあさましいことです。

2. あざけり (35~38節)

①嘲り (35)「**民衆はそばに立ってながめていた。指導者たちもあざ笑って言った。『あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。』**」イエスの十字架を見るために集まってきた民衆。そこにいたユダヤ人の指導者たちは、イエスをばかにして「あいつは他人を救ったけれど、自分は救えないのか」と。「キリスト(救い主)なら、自分を救ってみろ!」と。しかし、キリストはこの地上において、救われてはならなかったのです。む



レンブラント「三本の十字架」

しろ、死ぬことによって、人が生きるからです。(ヨハネ 12:24)

②酸いぶどう酒 (36~37)「**兵士たちはイエスをあざけり、そばに寄って来て、酸いぶどう酒を差し出し、『ユダヤ人の王なら、自分を救え』と言った。**」兵士たちが「ユダヤ人の王なら、自分を救え」と悪態をつきます。差し出した酸いぶどう酒は、痛みをやわらげるためですが、彼らは務めゆえに、それをなしたのでしょう。他の福音書を見ると、主はこの酸いぶどう酒を受け入れられていません。

③イエスの頭上 (38)「**『これはユダヤ人の王』と書いた札もイエスの頭上に掲げてあった。**」キリストの十字架の上には、彼らのいたずらが記されていました。「これはユダヤ人の王」。ピラトに問われた時に肯定されたことに基づいたものですが、図らずもそれは真実を記していたのです。イエスは「王の王」であるからです。

3. 十字架についた一人の信仰告白 (39~43 節)

①犯罪人のひとり (39)「**十字架にかけられていた犯罪人のひとはイエスに悪口を言い、『あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え』と言った。**」十字架についたうちの一人は、イエス・キリストについて、全く理解していません。彼はイエスを自分と同じ立場においたのです。悪口を言って、「キリストなら、自分と我々を救え!」と叫んだのです。残念ながら身の程を知らずでした。

②もう一人の信仰 (40~41)「**ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。『おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているのではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。』**」しかし、もう一人は違いました。彼には自分が犯罪人であるのと同時に罪人であるという自覚がありました。ですから、もう一人をたしなめて、自分たちとイエスは自分たちとは全く違って、主が何も罪を犯した方ではないということ明言するのです。彼には神に対する恐れがありました。

③パラダイスに (43~43)「**そして言った。『イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。イエスは、彼に言われた。『まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。』**」そして、彼は死を前にして、イエス・キリストにお願いするのです。キリストに自分を救い出してください。御国の一員に加えてくださいというお願いです。「思い出してください」と謙虚にお願いしていますが、そこに彼のイエス・キリストに対する信仰というものを見ることができのです。すると主は、「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」と。パラダイスとは栄光の樂園であります。死を前にして、このようなお言葉をいただけるとは、なんと光栄なことでしょう。

《結論》 今朝の聖書箇所には二つの大きなテーマがあります。一つはイエス・キリストが十字架に上られた時に言われた一つのお言葉です。苦しみの言葉、ののしりの言葉が出て、致し方がないのですが、十字架につけられた主は、「父よ。彼らをお赦してください。」(34節)と祈りの言葉をお伝えくださったのです。神である方は、自分を十字架につけた者たちを含めた人々のことを覚えながら、彼らをお赦してくださいと祈ってくださったのです。本来であるならば、罪を犯した本人が謝らなければならないのに、彼らに代わって、イエスはお赦してくださいと、とりなしてくださっているのです。イエスさまが、そのように祈ってくださっている理由は「彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」。つまり、自分の罪がわかっていないというのです。そういう面では、これはすべての人に共通した真理ではないでしょうか。「すべての人は罪を犯した」(ローマ 3:23)とありますが、自分がどれだけの罪人であるのかについて、私たちはほとんど理解していません。それでは、言いましょう。神である方、イエス・キリストが十字架にかかって死ななければならないほどに、あなたの罪は大きいのです。私たちは神の前に、自らの罪を過小評価しているのです。それゆえに、告白すべき張本人であるあなた自身が、「父よ、私の罪をお赦してください」と告白していきたいのです。また、この際に、人を赦すことができるように祈りたいのです。

もう一つのテーマは、イエスの両隣で共に十字架につけられた二人の対照的な反応です。一人は、イエスをののしりました。彼はイエスを自らと同じ立場に引きずり降ろして、ののしりました。兵士たちと同じ土俵で語ったのです。これこそが罪の根本的な問題です。つまり、神なる方を神としない、ということが罪の根本なのです。主はこの男のためにも、自らの命を投げ出そうとてくださっていたのです。なのに、彼はそれがわからずに、神なる方を人間である自らの所まで引きずり降ろしたのです。主なる神を見失っていたのです。ところが、もう一人の男は、自らの罪に気が付いたのです。神なる方を正當に神とし、主としたのです。彼はイエス・キリストは何も罪を犯しておらず、その男のためにも十字架にかかってくさる主であることがわかったのです。だからこそ、「あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください」と伝えることができたのです。彼の信仰告白でありました。あなたはいかがでしょう。主を主としていますか。神なる方を、自らの位置まで引きずり下ろすという愚かな罪を犯していませんか。気が付いたら、今すぐに告白いたしましょう。そして、私の罪をお赦してくださいと告白していこうではありませんか。今朝の聖書箇所は二つのテーマがありますが、共通しています。十字架の主の前に出て、主が十字

架につかれたのは、私の罪のためであったのだと認め、それを告白
していきましょう。